

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

A. コースワークの充実・強化

①人材養成目的に沿った科目構成の整理

《理工農系》

●埼玉大学理工学研究科環境システム工学系専攻

「環境社会基盤国際連携大学院プログラム」の事例

(具体的に何を実施したのか)

我が国のみならず発展途上国をはじめとする海外においても自然環境と調和した社会基盤整備を担うことのできる高度技術者および研究者の養成を目的とし、先進的に英語による教育および研究指導を実施していた従来の教育プログラムをベースに、学術協定を締結している海外の大学院と連携した講義および研究指導や、海外でのインターンシップを単位化する科目の新設を含む形で、日本人学生と留学生の双方を対象とした国際色をより前面に出した科目構成の教育プログラムを整備した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

- ・可能な限り多くの学生が新設した海外インターンシップを経験できるよう、連携大学院の協力も得て、受け入れ先を確保した。また、インターンシップ先での学生の活動を充実させるため、受け入れ先との十分な事前連絡を行い、さらに事後評価に基づいて次年度の活動内容を改善した。
- ・海外の大学院と連携した教育および研究指導体制に関して、助成終了後の継続性を鑑み、実施コストが低い遠隔講義システムを整備した。
- ・ネイティブスピーカーによる講義参観や、連携大学院での専門科目開講、海外派遣時のセミナーなどにより、教員の英語による教育および研究指導能力の向上を図った。
- ・学生の自習を補助するため、講義で用いる英文教材の作成、英文シラバスの整備などを行った。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

- ・海外インターンシップを科目として加えたことや、海外連携大学院の教員による指導の機会を設けたことで、本教育プログラムが国際性を重視していることを学生に対してより明確に示し、学生もその特色をより意識することができるようになった。
- ・改革した教育プログラムを支援期間終了後も継続的に実施するために、ランニングコストの低い遠隔講義システム、英文教材、英文シラバスなどを整備して

おり、それらは現在も効果的に活用されている。